

子どもの怒り経験と怒り表出に関する研究

— 親に怒りを感じた場合について —

磯部美良・中村多見¹・江村理奈

(2003年9月30日受理)

Children's experience of anger toward their parents and anger expression

Miyoshi Isobe, Tami Nakamura, and Rina Emura

The main purpose of this study was to investigate the relationships among children's experience of anger toward their parents, cognitive judgements, emotions, and target of anger expression. A total of 390 forth-through ninth-grade students participated in this study. Children's recent anger episodes were assessed in terms of the instigator (father or mother), cognitive judgments, anger expression, etc. By combining the instigator with the target of children's anger, two groups (congruent and incongruent) were identified and compared. The main results were as follows: (1) Compared to the congruent group, the incongruent group exhibited less hostile attribution toward the instigator's intention. (2) Incongruent group was more likely to choose a target lower in status and affection than their parents. (3) Compared to the congruent group, the incongruent group showed stronger feelings of happiness or irritation after they expressed their anger.

Key words: anger, aggression

キーワード：怒り，攻撃性

問題と目的

子どもの問題行動の本質を理解するためには、その行動に目を向けることが重要である（宮下・大野，2002）。攻撃性を背景とした子どもの問題行動が増加している今日、「子どもがなぜ怒り、その怒りにどのような対処をするのか」を検討することは重要である。

核家族化や都市化の進展、教育水準の向上、技術革新にともなう、家庭・学校・社会の子どもに対する役割機能の変化は、子どもの人格の未熟化や自立心の低下など、全体としての適応力や耐性の弱体化につながる恐れがある。

「子どもの心の荒れ」と評される攻撃性の問題も、子どもに対する役割機能の変化が引き起こした結果かもしれない。Storr (1968) は、正常な攻撃性の発達

には自らの攻撃性を正当化できるように、安心して攻撃性をぶつけられる大人の存在が必要であり、そうすることで攻撃性を自己の内面に統合することができる」と述べている。現在、社会問題視されている問題行動の多くは、就学年齢にある子どもによって引き起こされている。この時期の子どもにとって最も身近な「大人」とは「親」であり、家庭における子どもの攻撃性について検討することは必要であると考えた。

従来、怒りという感情は衝動的で、非合理的なものときれ、攻撃行動の直接の動因であると見なされてきた。しかし、感情の認知的側面を重視するようになった結果、怒りのすべてが攻撃行動の動因になるのではなく、怒りを表出する手段の1つとして攻撃行動があることが明らかになってきている（Averill, 1982；中村，2003；大淵・小倉，1984）。例えば、怒りの表出反応として、攻撃的な表出反応以外では、話し合いや相談といった「非攻撃的反応」、鎮静や隠蔽といった

¹広島大学大学院教育学研究科研究生

「怒りの抑制」などの表出反応がある(中村, 2003)。このことから、怒りを攻撃的に表出することには、怒りという感情以外の要因の影響が多くあると考えられる。例えば、怒りを感じる状況には、必ず個人にとって不快な出来事が存在する。その不快な出来事には、被害や怒りを感じた相手との人間関係といった「状況要因」、被害に対する認知判断といった「内的媒介要因」、年齢や性別といった個人差を生み出す「個人要因」など多くの要因が含まれる(大淵, 1986)。

Averill (1982) は、怒りの感情を様々な側面から、できるだけ現実場面に沿った内容で測定するために、エピソード法を用いた質問紙を作成している。この質問紙は、対象者に自分の怒りの経験を想起させた上で、認知、動機づけ、生理、表出、表出後の気分などの様々な水準において自分の経験を評定させるものである。本研究では、この質問紙を日本語訳した大淵・小倉(1984)を参考に、質問紙を作成し調査を試みた。

本研究で用いる質問紙には、従来の質問紙とは異なる点がある。それは、怒りの経験で怒りを感じた対象(以降、怒り対象)の特定に加えて、怒りを表出した対象(以降、表出対象)を特定する項目を追加した点である。その理由として、従来の研究に対する以下のような問題意識が存在する。従来の研究では、怒り対象の特定は試みられているものの、表出対象の特定はされていなかった。現実場面の怒りの経験を想定すると、怒り対象と表出対象が異なる場合もあり、従来のような怒り対象と表出対象が同一人物であることを前提にしたような調査には問題があると考えられる。つまり、怒り対象と表出対象が同じ場合と異なる場合とでは、怒りの経験や表出、表出後の気分などに何らかの差異が認められると考えられ、従来のような2つの場合のデータを混合している可能性のある検討では不十分であると指摘できる。

そこで、本研究では、怒り対象と表出対象をそれぞれ特定した上で、両対象が同じ場合を「一致群」、異なる場合を「不一致群」とした分類を試みる。そして、怒り対象と表出対象の一致もしくは不一致によって、怒り経験や怒り表出、怒り表出後の気分にどのような差異が認められるのかを検討することを目的とする。

方法

調査対象者

兵庫県と広島県の公立小中学校に在籍する小学4年生から中学3年生の児童生徒390名(男子189名、女子201名)に質問紙調査を実施した。このうち、回答に不備のあった者を除いた341名(男子154名、女子187

名:有効回答率87.4%)を分析対象者とした。

手続き

担任が学級ごとに質問紙を配布し、回答を得た後、回収した。回答時間はおよそ30分であった。

質問紙の構成

Averill (1982) や大淵・小倉 (1984) を参考に、「怒りの日常経験」の質問紙を作成し、怒り対象を「親」に設定した。

怒り経験 被験者に、過去1週間で最も怒りを感じた経験を1つ想起してもらい、具体的に記述させた。過去1週間に強く怒りを感じた経験のない者には、それ以前の経験を記述させた。

怒り対象の特定 確認のため、怒りを感じた対象について、父親か母親かを明記させた。

怒り対象への好意度 (1項目) 怒り対象に対する好意度について、「好きでない(1点)」～「とても好き(5点)」までの5件法でたずねた。

怒り対象との地位関係 (1項目) 対象者から見た怒り対象の地位について、「あなたより弱くてこわくない存在(1点)」、「あなたと同じくらいの強さでこわくない存在(2点)」、「あなたより強くてこわい存在(3点)」の3件法でたずねた。

被害 (6項目) 怒り経験において、対象者が受けた被害として、身体的苦痛、物質的損害、欲求不満、プライドの損傷、道義違反(ルールや約束を破る)、期待に背くの6つを取り上げ、それぞれについて「しなかった(1点)」～「たくさんした(3点)」までの3件法でたずねた。

被害に対する認知判断 (予測性と意図性、各1項目) 予測性(怒り対象はあなたが怒りを感じることを予測していたと思うか)について、「あなたが怒りを感じる事が分からなかった(1点)」、「どちらでもない(2点)」、「あなたが怒りを感じる事が分かっていた(3点)」の3件法でたずねた。意図性(怒り対象はあなたを意図的に怒らせようとしたと思うか)について、「わざとではない(1点)」、「どちらでもない(2点)」、「わざとである(3点)」の3件法でたずねた。

怒りの強さ (1項目) 怒り経験において感じた怒りの強さについて、「とても弱い怒り(1点)」～「とても強い怒り(5点)」までの5件法でたずねた。

表出対象の特定 怒り経験において感じた怒りを表出した対象について、父親、母親、兄、弟、姉、妹、男友達、女友達、男教師、女教師の10の対象からひとつ選択させた。どれにも当てはまらない場合は、「その他」としてその対象を具体的に記述させた。

表出対象への好意度 (1項目) 表出対象に対する好意度について、「好きでない(1点)」～「とても好

き（5点）」までの5件法でたずねた。

表出対象との地位関係（1項目） 対象者から見た表出対象の地位について、「あなたより弱くてこわくない存在（1点）」、「あなたと同じくらいの強さでこわくない存在（2点）」、「あなたより強くてこわい存在（3点）」の3件法でたずねた。

表出反応（8項目） 怒り経験において感じた怒りを表出した手段について、身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃、怒りの伝達（壁を殴るなどして相手に怒りを伝える）、話し合い、相談、鎮静（こころを鎮める）、隠蔽（怒りを隠す）の8つを取り上げ、それぞれについて「しなかった（1点）」～「たくさんした（3点）」までの3件法でたずねた。

表出反応に対する認知判断（予測性と意図性、各1項目） 予測性（あなたは表出対象が怒りを感じることを予測していたか）について、「相手が怒りを感じることが分からなかった（1点）」、「どちらでもない（2点）」、「相手が怒りを感じることが分かっていた（3点）」の3件法でたずねた。意図性（あなたは表出対象を意図的に怒らせようとしたか）について、「わざとではない（1点）」、「どちらでもない（2点）」、「わざとである（3点）」の3件法でたずねた。

表出後の気分（9項目） 怒り表出後の気分について、喜び、腹立ち、勝利感、落胆、嫌悪感、恥、爽快感、心配、楽の9つを取り上げ、それぞれについて「そういう気持ちにならなかった（1点）」～「とてもそういう気持ちになった（3点）」の3件法でたずねた。

結果

親との怒り経験について

1. 怒り対象と表出対象の一致と不一致の分類

表1は、怒り対象と表出対象が同じである「一致群」と、怒り対象と表出対象が異なる「不一致群」の人数構成を、怒り対象別に示したものである。ここから、怒り対象が父親、母親ともに、不一致群の方が一致群よりも多かった。このことから、親への怒りを直接、親に表出することは少なく、親とは異なる対象へ表出することの方が多分に分かる。

また、怒り対象として多く選択されていたのは、父親より母親であった。

表1. 怒り対象別の一致群と不一致群の人数

| | 怒り対象 | |
|------|------|-----|
| | 父親 | 母親 |
| 一致群 | 20 | 77 |
| 不一致群 | 71 | 173 |

表2は、怒り対象の特徴である「好意度」と「地位関係」の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。「好意度」について、怒り対象（父親・母親）×群（一致群・不一致群）の2要因分散分析を行なった。その結果、怒り対象の主効果が有意となり（ $F(1, 337) = 10.52, p < .001$ ）、母親への好意度の方が父親より高かった。また、「地位関係」について、怒り対象（父親・母親）×群（一致群・不一致群）の2要因分散分析を行なった。その結果、怒り対象の主効果が有意となり（ $F(1, 337) = 8.56, p < .01$ ）、父親の地位の方が母親より高かった。このことから、怒り対象として多く選択されていた母親には、「父親より好意度が高く、地位が低い」という特徴があることが分かる。

表2. 怒り対象への好意度と怒り対象との地位関係の対象別、群別の平均値と標準偏差

| | 父親 | | 母親 | |
|------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 一致群 | 不一致群 | 一致群 | 不一致群 |
| 好意度 | 3.35 (1.31) | 3.37 (1.19) | 3.65 (1.25) | 4.09 (0.94) |
| 地位関係 | 2.60 (0.50) | 2.61 (0.57) | 2.43 (0.57) | 2.32 (0.53) |

()内はSDを示す。

2. 被害

表3は、被害（身体的苦痛、物質的損害、欲求不満、プライドの損傷、道義違反、期待に背く）の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。項目ごとに、怒り対象（父親・母親）×群（一致群・不一致群）の2要因分散分析を行なった。その結果、いずれの項目においても有意差は認められなかった。このことから、父親からの被害と母親からの被害には、大きな違いがないことが言える。また、受ける被害の内容が、怒りを表出する段階での表出対象の選択には影響を及ぼさないことも分かる。

表3. 被害の対象別、群別の平均値と標準偏差

| | 父親 | | 母親 | |
|---------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 一致群 | 不一致群 | 一致群 | 不一致群 |
| 身体的苦痛 | 1.40 (0.68) | 1.37 (0.62) | 1.30 (0.61) | 1.28 (0.55) |
| 物質的損害 | 1.40 (0.68) | 1.34 (0.53) | 1.32 (0.64) | 1.30 (0.55) |
| 欲求不満 | 1.85 (0.75) | 1.90 (0.72) | 1.92 (0.77) | 1.87 (0.70) |
| プライドの損傷 | 1.55 (0.76) | 1.73 (0.76) | 1.73 (0.81) | 1.59 (0.70) |
| 道義違反 | 1.55 (0.76) | 1.44 (0.69) | 1.58 (0.71) | 1.38 (0.61) |
| 期待に背く | 1.50 (0.69) | 1.37 (0.66) | 1.52 (0.74) | 1.42 (0.65) |

()内はSDを示す。

3. 被害に対する認知判断と怒りの強さ

表4は、被害に対する認知判断である「予測性」と「意図性」の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。「予測性」について、怒り対象（父親・母親）×群（一致群・不一致群）の2要因分散分析を行なった。その結果、怒り対象の主効果が有意となり（ $F(1, 337) = 7.25, p < .01$ ）、母親か

らの被害に対する予測性の認知の方が父親より高かった。また、「意図性」について、怒り対象(父親・母親)×群(一致群・不一致群)の2要因分散分析を行なった。その結果、群の主効果が有意となり($F(1, 337) = 4.04, p < .05$), 一致群の被害に対する意図性の認知の方が不一致群より高かった。ここから、一致群は、自分が受けた被害に対して、「親は自分を怒らせるためにわざとした」と認知していたことが分かる。

次に、怒りの強さについて、怒り対象(父親・母親)×群(一致群・不一致群)の2要因分散分析を行なった。その結果、有意差は認められなかった。このことから、怒りの強さは父親か母親かによって大きく異なることはないこと、そして、怒りの強さによって表出対象の選択に差が生じることはないことが分かる。

表4. 被害に対する認知判断としての予測性と意図性、および怒りの強さの対象別、群別の平均値と標準偏差

| | 父親 | | 母親 | |
|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 一致群 | 不一致群 | 一致群 | 不一致群 |
| 予測性 | 1.80 (0.70) | 1.85 (0.73) | 2.19 (0.69) | 1.99 (0.68) |
| 意図性 | 1.65 (0.75) | 1.42 (0.65) | 1.55 (0.68) | 1.40 (0.60) |
| 怒りの強さ | 3.25 (1.02) | 3.07 (1.20) | 3.21 (1.03) | 2.94 (1.12) |

()内はSDを示す。

怒り表出について

1. 表出対象

表5に、不一致群が表出対象として選択した人物の内訳を示す。表5から、不一致群が表出対象として多く選択したのは、きょうだいと友人であることが分かる。

表5. 不一致群の表出対象の内訳

| | 怒り対象 | |
|-----|------|----|
| | 父親 | 母親 |
| 父親 | - | 9 |
| 母親 | 7 | - |
| 兄 | 8 | 24 |
| 弟 | 9 | 28 |
| 姉 | 8 | 18 |
| 妹 | 13 | 23 |
| 男友達 | 10 | 26 |
| 女友達 | 12 | 25 |
| 男教師 | 0 | 4 |
| 女教師 | 0 | 1 |
| その他 | 4 | 15 |

表6は、怒り対象と表出対象の特徴である「好意度」と「地位関係」の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。表出対象については、怒り対象と比較してどのような特徴をもつ人物であるかを調べることにした。まず、「好意度」について、父母別

に群(一致・不一致)×対象(怒り対象・表出対象)の2要因分散分析を行なった。その結果、怒り対象が母親の場合において、群と対象の交互作用が有意となり($F(1, 248) = 19.73, p < .001$), 不一致群における母親への好意度の方が表出対象より高かった。また、「地位関係」について、父母別に群(一致・不一致)×対象(怒り対象・表出対象)の2要因分散分析を行なった。その結果、怒り対象が父親と母親のいずれの場合も、群と対象の交互作用が有意となり(父親: $F(1, 89) = 13.80, p < .001$, 母親: $F(1, 248) = 13.68, p < .001$), 不一致群における親の地位の方が表出対象よりも高かった。このことから、不一致群が親以外の表出対象を選択するとき、その表出対象には、「親より好意度と地位が低い」人物が選択されることが分かる。

表6. 怒り対象と表出対象への好意度と、怒り対象と表出対象との地位関係の対象別、群別の平均値と標準偏差

| | | 父親 | | 母親 | |
|------|------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | | 一致群 | 不一致群 | 一致群 | 不一致群 |
| 好意度 | 怒り対象 | 3.35 (1.31) | 3.37 (1.19) | 3.65 (1.25) | 4.09 (0.94) |
| | 表出対象 | 3.25 (1.29) | 3.15 (1.38) | 3.57 (1.24) | 3.25 (1.34) |
| 地位関係 | 怒り対象 | 2.60 (0.50) | 2.61 (0.57) | 2.43 (0.57) | 2.32 (0.53) |
| | 表出対象 | 2.60 (0.50) | 1.83 (0.70) | 2.32 (0.64) | 1.84 (0.63) |

()内はSDを示す。

2. 表出反応

表7は、怒りの表出反応(身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃、怒りの伝達、話し合い、相談、鎮静、隠蔽)の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。項目ごとに、怒り対象(父親・母親)×群(一致群・不一致群)の2要因分散分析を行なった。その結果、「身体的攻撃」と「間接的攻撃」、「相談」において、群の主効果が有意、あるいは有意傾向となり(身体的攻撃: $F(1, 337) = 16.73, p < .001$, 間接的攻撃: $F(1, 337) = 3.18, p < .10$, 相談: $F(1, 337) = 3.42, p < .10$), いずれも不一致群の方が一致群より高い得点を示した。このことから、不一致群は、親以外の対象に怒りを表出するとき、攻撃的な手段(身体的攻撃、間接的攻撃)を多く用いることがうかがえる。

表7. 表出反応の対象別、群別の平均値と標準偏差

| | 父親 | | 母親 | |
|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 一致群 | 不一致群 | 一致群 | 不一致群 |
| 身体的攻撃 | 1.10 (0.45) | 1.51 (0.71) | 1.17 (0.44) | 1.51 (0.69) |
| 言語的攻撃 | 1.95 (0.60) | 2.03 (0.70) | 2.13 (0.75) | 2.02 (0.79) |
| 間接的攻撃 | 1.05 (0.22) | 1.20 (0.47) | 1.16 (0.46) | 1.27 (0.57) |
| 怒りの伝達 | 1.40 (0.75) | 1.45 (0.67) | 1.69 (0.78) | 1.39 (0.67) |
| 話し合い | 1.20 (0.62) | 1.18 (0.39) | 1.16 (0.46) | 1.23 (0.54) |
| 相談 | 1.25 (0.55) | 1.48 (0.71) | 1.26 (0.59) | 1.39 (0.69) |
| 鎮静 | 1.80 (0.83) | 1.58 (0.71) | 1.68 (0.75) | 1.58 (0.73) |
| 隠蔽 | 1.40 (0.68) | 1.48 (0.71) | 1.38 (0.69) | 1.28 (0.56) |

()内はSDを示す。

3. 表出反応に対する認知判断

表8は、表出反応に対する認知判断である「予測性」と「意図性」の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。「予測性」と「意図性」のそれぞれについて、怒り対象（父親・母親）×群（一致群・不一致群）の2要因分散分析を行ったが、有意差は認められなかった。

表8. 表出反応に対する認知判断としての予測性と意図性の対象別、群別の平均値と標準偏差

| | 父親 | | 母親 | |
|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 一致群 | 不一致群 | 一致群 | 不一致群 |
| 予測性 | 2.05 (0.69) | 2.18 (0.70) | 2.08 (0.60) | 2.24 (0.63) |
| 意図性 | 1.70 (0.73) | 1.79 (0.70) | 1.70 (0.71) | 1.94 (0.81) |

()内はSDを示す。

怒り表出後の気分について

表9は、怒り表出後の気分（喜び、腹立ち、勝利感、落胆、嫌悪感、恥、爽快感、心配、楽）の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。項目ごとに、怒り対象（父親・母親）×群（一致群・不一致群）の2要因分散分析を行なった。その結果、「喜び」において群の主効果が有意となり ($F(1, 337) = 8.31, p < .01$)、不一致群の方が一致群より喜びを多く感じていた。また、「腹立ち」において怒り対象と群の交互作用が有意となり ($F(1, 337) = 7.45, p < .01$)、怒り対象が父親のとき、不一致群の方が一致群より腹立ちを多く感じていた。

表9. 怒り表出後の気分の対象別、群別の平均値と標準偏差

| | 父親 | | 母親 | |
|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 一致群 | 不一致群 | 一致群 | 不一致群 |
| 喜び | 1.15 (0.37) | 1.48 (0.69) | 1.18 (0.48) | 1.34 (0.60) |
| 腹立ち | 1.25 (0.55) | 1.69 (0.79) | 1.45 (0.70) | 1.37 (0.61) |
| 勝利感 | 1.25 (0.55) | 1.45 (0.75) | 1.31 (0.59) | 1.36 (0.66) |
| 落胆 | 1.40 (0.60) | 1.39 (0.60) | 1.38 (0.65) | 1.29 (0.56) |
| 嫌悪感 | 1.45 (0.69) | 1.73 (0.76) | 1.61 (0.81) | 1.51 (0.68) |
| 恥 | 1.35 (0.67) | 1.27 (0.56) | 1.14 (0.45) | 1.22 (0.54) |
| 爽快感 | 1.85 (0.81) | 1.83 (0.81) | 1.56 (0.80) | 1.88 (0.84) |
| 心配 | 1.55 (0.76) | 1.54 (0.69) | 1.36 (0.69) | 1.40 (0.65) |
| 楽 | 1.70 (0.80) | 1.79 (0.81) | 1.57 (0.77) | 1.80 (0.81) |

()内はSDを示す。

考 察

本研究の結果、怒り対象と表出対象に不一致が生じる場合がかなりの割合に上ることが明らかになった。このことから、親密で良好な人間関係にある親でも、怒りを出さず表出する対象としては不適切であると判断されるようであった。

そして、怒り対象と表出対象の不一致が生じる要因に、「被害に対する意図性の認知判断」が挙げられる。

不一致群の子どもは、一致群の子どもに比較して、怒り対象である親の意図を曖昧なものとして認知していた。おそらく、不一致群の子どもは、親の意図が曖昧であるために、親に対して自分の怒りを直接表出することにためらいを感じ、親とは別の対象へ怒りを表出したと考えられる。これに対して、一致群の子どもは、親が自分を怒らせるためにわざとしたのだと認知することにより、親に対して直接、怒りを表出することを正当化していたものと考えられる。

では、不一致群の子どもは、怒りの表出対象として、どのような人物を選択していたのであろうか。表5から分かるように、不一致群の選択した怒りの表出対象の6割は、きょうだいと友人であった。そして、不一致群の子どもにとって、それらの表出対象は、怒り対象である親に比較して好意度と地位関係が低いという特徴があった。この結果について詳しく見てみると、まず、好意度において、怒り対象として母親をあげた不一致群の子どもは、怒りの表出対象として、母親ほど好意を抱いていない相手を選択していることが示された。また、地位関係に関しては、不一致群の子どもは、怒りの表出対象として、両親ほど地位の高くない相手を選択していた。このことから、怒りの表出対象として、親が不適切であると判断される理由には、親の好意度と地位の高さがあることが分かった。

また、不一致群の子どもは、自分の怒りを親以外の相手に対して表出する手段として、身体的攻撃、間接的攻撃、相談を選択することが多かった。不一致群の子どもが、親以外の第三者に相談を持ちかけることによって、自分の怒りを静めることは適応的である。しかし、身体的攻撃や間接的攻撃を多く用いていたことは、新たな被害者を作り、怒り経験が繰り返される可能性があるという点で注意を要する。

怒り表出後の気分について、一致群の子どもに比べ不一致群の子どもは、怒り対象が父親であった場合も母親であった場合も、「喜び」を強く感じていた。「喜び」に関しては、ポジティブとネガティブの2つの解釈が成り立つ。1つは、相談を通して、自分の怒り経験を第三者に分かってもらえたことによる喜びである。もう1つは、自分の怒りを攻撃的な手段で第三者に発散することによって得られた喜びである。また、父親が怒り対象であった不一致群の子どもは、怒り表出後、「腹立ち」を強く感じていた。ここから、父親との間で怒りが経験された際、父親に対して、直接、何らかの形で怒りが表出されなければ、父親との確執はより深いものとなることが示唆される。父親の不在が問題視される現代の社会状況を考えると、母親に比べて父親との間で生じた問題は、時間的制約やコミュニケーション

ション不足から、解決が難しいとも考えられる。

Storr (1968) は、「正常な攻撃性の発達には、大人の存在が必要である」という見解から、攻撃性を受け止める親の役割の低下と少年犯罪の増加を関係づけている。本研究の結果、親に対して、直接、怒りを表出しない子どもや、それを第三者に対して攻撃的に表出する子どもが数多く存在することが明らかになった。その原因が、Storr (1968) の指摘するような親の役割の低下にあるのかどうか、本研究から断定することはできない。しかし、子どもにとって、最も身近で重要な「大人」は「親」であり、子どもの正常な攻撃性の発達に、攻撃性を受け止め、子どもの内面にうまく統合させる親の役割は欠かせないと考えられる。

今後の課題としては、攻撃性を背景とした子どもの問題行動を理解し、対応策を講じるために、怒りが攻撃的に表出される過程を検討することである。

【引用文献】

- Averill, J. R. 1982 *Anger and aggression: An essay on emotion*. New York: Springer-Verlag.
- 宮下一博・大野 久 (編著) 2002 *キレる青少年の心* 北大路書房
- 中村多見 2003 *子どもの怒り経験と怒り表出に関する研究* 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 443.
- 大淵憲一 1986 *質問紙による怒りの反応の研究: 攻撃反応の要因分析を中心に* 実験社会心理学研究, 25, 127-136.
- 大淵憲一・小倉左知男 1984 *怒りの経験(1): Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況* 犯罪心理学研究, 22, 15-35.
- Storr, A. 高橋哲郎 (訳) 1978 *人間の攻撃心* 晶文社. (Storr, A., 1968, *Human aggression*, Middlesex, England: Penguin Press.)

(主任指導教官 前田健一)